

熊野詣での衰頹

新城, 常三

<https://doi.org/10.15017/2329452>

出版情報 : 史淵. 87, pp.61-84, 1962-03-05. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

熊野詣での衰頹

新 城 常 三

一

古代末の院を主体とする貴族階級の熊野詣でがやがて鎌倉時代に入り東国の地頭級武士を中心として発展した過程に就いては先述した処であつた⁽¹⁾。本稿に於ては、熊野詣でがその後南北朝室町時代に入り如何に展開し、やがて近世に入り如何に衰頹したかを考察し、伊勢参宮その他一般社寺参詣と異り、今日殆ど歴史的事象と化し去つた熊野詣で全史の幕を閉づることとしたい。先づ南北朝室町時代の参詣の具体例を地域別に掲げよう。

畿内の参詣例は、前代同様所見少く、依然低調であつた様である。室町初頭「伊勢、熊野穢あるべからず」の神礼を携えて、畿内並に、その周辺を巡歴した国阿上人が、随所で際会した者は、ただ伊勢信仰者及び参宮者の群集だけで、熊野信仰者の発見されないのは、当時既に畿内の熊野信仰、参詣が、伊勢のその下風に立つている事を物語るものではあるまいか。しかし、もとより畿内の参詣者が皆無な訳ではなく、若干の実例のある外、熊野先達の活動や、更に熊野講の発達等がまたこれを裏付けている。熊野講に就ては既に別述したが、嘉吉元年九月、幕府徳政令で、熊野講要脚が神明講要脚等と共に、徳政の除外条項となつてゐるのは、当時既に熊野講が、社会的にある程度顕在的存在である事を示すものであろう。爾後永正十七年迄この条項は、幾度かの幕府徳政令にも繰り返し掲出されている。しかし熊野講の実例としては、僅かに応永三十一年近江甲賀郡三雲野村殿講と、文明年間京都三条の先達を講親とする二例を挙ぐるに過ぎない。以

上熊野講の存在は、一応の熊野詣での存在を物語るとしても、関係史料は伊勢講に比較して格段に寡少で、この点からも、畿内の熊野信仰、参詣に多くの期待が寄せられない。特に室町末に於て伊勢講の隆々たる進展とは対照的に、熊野講史料が永正以降全く断絶するのも、両者参詣の明暗を、暗示するものがある。畿内からの熊野参詣の具体例には、足利氏夫人及び公卿等の貴族の外、文明前後京都一富商の数回参詣、京都今出川住人同行五名の市民、商人がある。更に前記応永三十一年、近江甲賀郡三雲野村殿講が、地侍から僧、女房、中小農民迄を含む広汎な階層から成立する点から、中小農民、商人等の民衆層も熊野詣でに参加したものと推察されるが、ここに畿内地域と次の東国地方との相異がある。

次に畿外に目を転ずれば、先ず鎌倉時代以来、伝統的な熊野信仰の金城湯池たる東国の熊野詣では、前代以来の盛行がある程度維持していたようである。

先ず奥州白河の結城氏には、永享十二年結城氏母一行三十名の参詣の外、その先達八槻氏の伝来文書には、結城氏関係の参詣文書が甚だ多い。寛正三年白河直朝進上の馬二十四、人百人に対する幕府過書は別とするも、文明十年白河奥州下向人二百人、明応四年奥州住人白河上洛人七百人に対する幕府過書、明応七年奥州下向方州人への長尾能景、永正六年奥州白河よりの参宮方二百人に対する結城政盛過書の外、某年二百人並に物詣での道者五十人に対する過書等、何れも文書所蔵者が熊野先達八槻氏である点より推しても、これらは何れも熊野詣でに關係あろう。事実彼八槻氏の他の文書には、永正二年石川衆、享祿二年石川大寺、某年白河氏一家、及び某年前下野守斑目直家等幾多の熊野詣で關係史料を収めているのである。

八槻氏の隣郡石川郡の先達で、八槻氏と屢々繩張争いを起している石川氏の旦那も、永祿、元龜の頃屢々参詣している。更に陸奥の北方では、葛西氏にも参詣の形跡がある。

関東では、応安八年地頭二階堂氏、永正九年以前、常陸の明全比丘尼が、熊野詣で三度に及んでいる。更に上野では、

嘉吉以後応仁、文明以前の武藏太田道真が上野先達大藏坊輩下百名の参詣者に対し、毎年の関税免除を約しているのは、⁽²³⁾大藏坊旦那の参詣が当時年々百名程度は数えられたのであろう。大藏坊は関東有数の大先達であるから、これは必ずしも一般先達の旦那の参詣量の平均値を意味するとは言えないが、その一斑は推せよう。

更に関東より中部地方に移つては、永享七年甲斐跡部某、甲斐板垣の熊谷遠江守次男玄蕃助あり、信濃には明応の頃仁科明盛、⁽²⁵⁾長祿前後駿河富士下方住人数名の参詣あり、その内一名の武士は参詣両度に及んでいる。⁽²⁶⁾

更に遥かに西国に転ずれば、嘉吉の頃薩摩島津氏あり、⁽²⁷⁾永正の頃阿波麻殖修理亮殿内方のひわさはま殿妻女、御供小二郎がある。⁽²⁸⁾又これより早く、永徳以降備前新田荘から長船を始めとして多数の刀匠が、屢々参詣したのは、⁽²⁹⁾かかる工芸家への熊野信仰の滲透と参詣の新たな階層の出現を示すものとして注意される。

以上の外、別に詳記した各地の熊野先達の活動は、⁽³⁰⁾夫々の先達に引導される参詣者の存在を窺わすが、実例としては大体以上の如くで、東国以外は比較的乏しい。

しかし乍、この外、室町期の熊野詣でに関する若干の抽象的記述がある。例えば、文明前後活躍した真宗中興の祖蓮如が、

かみにも、仏にもなれぬれば信仰なし、されば熊野、伊勢の神主は、神をばまことに信せず、ただまゐる人に、せに
まゐらせよかしと思ふばかりなり、

と軽侮をこめて非難したのや、⁽³¹⁾天文頃の「宗吾大草紙」に、

伊勢へ御参候を参宮と申候、八幡へは社参と申候、熊野へは参詣と申、

とあるのは、共に伊勢参宮に竝ぶ又はそれに次ぐ熊野詣での地位を物語つていとも解される。更にその後の史料としては、天正初年、毛利家臣玉木吉保の熊野参詣に、道々行連れたる者二、三百名あり、又、著名な事ながら、太閤記に、

天正九年中略附城の御普請は、七月一日より鉞初有しが、十日頃にははや中略出来にけり中略番士五、六十人づつ入替入替夜番、廻番、蟻の熊野参りする如く、隙透間もなく見えにけり、

とある等、室町末、近世初頭には熊野詣では、尚衰えざる姿を示しているかの如くである。

以上の諸史料を総合して、解釈するに、室町期の熊野詣では、一見尚相当の盛況を誇つたものの様に感ぜられる。しかし乍、次代の江戸時代に於る熊野詣での凋落は後述の如く明かな事実である。それならその凋落は全く江戸時代に始る近世的現象であろうか。又はそれ以前室町時代以降の漸進的傾向で、既に中世にその端緒が求められるのであろうか。恐らく後者であろう。以上の如く参詣の現象面よりしては、室町期の参詣量と前代鎌倉時代のそれとを対比し得ないが、恐らく室町時代に至つて停滞乃至低下しつつあつて、少くとも、大きな上昇は希めなかつたものと思われる。民衆の成長、都市の発達、商人の進出等に依り、室町期に入り、伊勢参宮その外一般参詣が、顕著な上昇を遂げたのに対し、ひとり熊野では参詣界のかかる一般的趨勢と歩調を合せることなく、むしろ低調化しつつ、そのまま江戸時代の衰頹に聯つたものと考えられる。これは上述の参詣の現象面からは十分捉え得ないとしても、種々な事実を考慮する場合、否定し得ない様である。

先ず参詣者の母胎である御師、先達の有する旦那の経済価値が、伊勢神宮のそれに比して、かなり低い事である。その経済価値は、当時頻繁に行われた旦那売買の価格に依つて一応判定されよう。例えば神宮文庫蔵「輯古帖」十三冊には、室町時代の伊勢神宮御師の旦那売券等三十点以上を収めている。その内売買価格の明瞭なのを列挙すれば、次の如くである。

五貫	四例	六貫	一例	十貫	五例
十三貫	二例	十五貫	二例	二十五貫	一例
三十貫	一例	四十二貫五百文	一例	四十五貫	一例

五十貫	一例	六十貫	二例	百五十貫	一例
二百貫	二例	金子三十五匁	一例	金子五兩	一例

以上の如くで、その大体が推測されるが、他に同様な旦那売券を収むる徴古文府、神宮徴古館、農業館文書及び来田文書等、多数の御師文書等も大体同一傾向を物語っている。

これに反し、熊野旦那の売買価格は総体的に著しく低い。それも鎌倉末頃には、十貫、二十貫程度であつたが、その後、明かに低落している。寛正二年御師善成房の旦那安芸一族の売値は僅かに六百文に過ぎず、文明十五年小豆島では旦那一円で一貫文にすぎない。明応七年の玉井快助の売券の米三つは、恐らく三俵で、ほぼ平均価格一貫二、三百文程度であらう。⁽³⁴⁾ 翌八年には甲斐三日市のぶんご殿一人五百文と、那智山仙良院有助の、武蔵の旦那が一貫二百文の二例が見られる。⁽³⁵⁾ 更に翌明応九年円賀坊大夫が売渡した当国御郡五ヶ主本渡、賀茂浜中一円、天門道長一円並に永算之二門等が合せて一貫五百文に過ぎず、伊勢御師旦那売券に殆ど見られない一貫文台乃至それ以下がかなり多い。一貫文以上の場合でも、例えば、永正五年三ヶ山内一円、おふせ殿、ととろ殿、蔵人殿此一門一円、同きもと地下一族一円等合せてようやく二貫文であり、更に天文十八年多門坊政源が売却した常陸の旦那は、小栗一円、真壁一円、田中庄一円（海老島、大島、北条）下館一円、関郊一円、大方郡和賀八ヶ村、同匣瑤郡、下総豊田荘一円、同山川一円等非常に広汎な地域に亘るが、この価格も僅かに五貫文にすぎない。⁽³⁶⁾

以上は必ずしも売買価格の低い売券だけを抽出したものでない。則ち伊勢御師旦那にない一、二、三貫台がかなり多く、反対に伊勢に多い五十貫以上は、熊野の場合稀有である。以上の事実を如何に解すべきであるか。両者の旦那価格の実際的な相違は、同一基準、同一人数の価格を比較して始めて浮出せるのであるが、これは不可能である。しかし、先の寛正二年安芸一族が六百文、明応八年甲斐三日市ぶんご殿一人五百文等、熊野の場合旦那の一人又は一つの族縁団体が僅か

に五、六百文に過ぎないのに対し、伊勢御師旦那の場合には、例えば天文九年五月、尾張渡辺民部父子の同じ一類の売値が、八貫文であるという格段な相違の中に、その大体が推測されるように思われる。更に天正十年熊野実報院の売券でも、二五〇の屋敷の価格が僅かに一兩にすぎないのも少なすぎるであろう。この熊野旦那の経済価値の體的低さは何を意味するであろうか。それが武士等の場合、御師との聯りの緩み、又は旦那の参詣の減退等に由る旦那としての実質的価値の低下を意味するであろう。一般に武士の惣領体制が崩壊し、族的結合が殆ど無実化した中世末に於て、尚熊野御師、先達が、その旦那たる武士を依然一門、一族の表現をとつて把えているのは、実状に合はず、これはそのまま御師、先達と旦那間の現実的聯りの弛緩を示し、師旦那関係の實際的存在を疑わしむるものである。更に、地侍以下の農民、商人を主とする地縁の把握の場合の売買価格の低さは、同じく御師との聯りの緩み、又は旦那の参詣の減少の外、御師先達勢力の滲透度の浅さを示しているものと思われる。天文十八年、常陸、下総の売券に於て、数郡に亘る広汎な地域が、僅かに五貫文の売値であるのは、地域の広さの割合に比して旦那実数が非常に少ないこと則ちこの中の有力特定階層のみが旦那化しているに過ぎないことを意味するものと解される。これは常陸、下総等東国地方の農民の成長度の低さよりして、中小農民は、一般に一定の経済的負担を伴う旦那の資格に乏しく、自然御師、先達の繩張は少数の地侍、有力名主等農村の表層に止り、それ以下の下層部に及び難かつたのであろう。この事情は、熊野信仰の金城湯池たる奥州では、農民成長の後れからしても常陸下総等に比し一層著しいものがあるかと考えられる。これに關聯して注目すべきは、関東、奥羽等の東国のみならず、熊野御師又は先達の地盤には、一体に民衆の旦那を意味する地縁的表現が極めて乏しく、旦那の大半が上述の如き依然一族、一門の血縁的表現をとる武士であることである。これは当時伊勢御師が広汎に農村、都市に進出して、商人、農民の多くを旦那化し得、従つてその旦那の殆ど全てが地縁的表現をとると全く対照的で、このことは熊野御師先達が、新たに抬頭しつゝある多数の農民、商人の獲得に、十分成功を収め得なかつた事を物語るであろう。ここに伊

勢、熊野両社の参詣の今後の盛衰が卜される。しかも、熊野が最も憑みとする東国に於て、農民は隷屬性が特に強く、従つて身分的に経済的に旦那資格に一層乏しかつたことは熊野御師の不幸を更に深刻ならしめたであろう。更に彼等東国農民は仮に旦那となり得たとしてもその遠隔性に阻れて、容易に参詣を成就し得なかつたであろう。人々が旦那として、年々一定の経済的寄与を御師先達に為していること、そして、参詣に依つて一段と彼等を潤おすこと、そこに始めて旦那としての経済的価値が生ずる。従つて逆にある武士一族乃至ある地域の旦那の経済的価値の低さは、旦那自身の経済力の低さとか、広さの割合に滲透度が浅く、旦那実数の寡少であるか、彼等旦那が稀にしか参詣しない等何れかの理由に帰著するであろう。敍上の熊野旦那の売買価格の低さも亦同様の事を物語っているものと思われる。

こうして御師の旦那並に参詣者の大半が一部の武士に限られ、身分的、経済的成長を遂げてやがて武士に代り参詣界の王座にのし昇ろうとする民衆を、容易にその陣列に加え得なかつたことは、次等に熊野詣でをして沈滞の一路を辿らしむる最大の原因であつたと思われる。更にその上、熊野詣での質的退化が、熊野詣での今後の進路に暗影を投ずるものとなつている。当時の人々にとり、旅は一般に生涯に於る稀有な体験であり、その機会も少いから、一旦旅に出れば、出来るだけ多くを見、且つ多数の社寺に参詣しようとする希望が強いであろう。

鎌倉時代の熊野参詣者も亦、先述の如く郷土と熊野とを直線的に往還したのではなく、他社寺及び京都等に立廻る者が多い。この傾向は南北朝以降も同様で、熊野参詣が往々熊野巡礼と呼ばれる中にも暗示されている。具体的には熊野参詣は、伊勢参宮乃至高野詣等と一緒に行われる例が多いのである。⁽⁴⁾その際、問題は参詣の主目標がどこかということである。鎌倉時代の熊野詣者が他社寺を巡歴しても、それは熊野詣の次でを利用したにすぎず、眼目はあく迄で熊野にあつたが、南北朝以降は逆転している場合が多い様である。

例えば、先掲陸奥八槻文書の数点の過書は、文書伝来者八槻氏の熊野先達の身分からして、熊野詣関係者に与えられた

過書と解して支障ないものと思われるが、しかしどの一通として熊野詣でと明記されたものはなく、その目的には何れも下向、上落、参宮則ち伊勢参宮等と記載されておる点よりして、熊野詣では、それらの次で行われた副次的な行動に過ぎない様である。天正初年、島津氏重臣日向井覚兼が、伊勢、熊野両参詣を名目として重職の解任方を申請したが、當時島津氏家臣団の参宮風潮と、彼自身の強い伊勢信仰より推して、主眼が伊勢参宮に置かれた事は疑ない。又同じ頃、毛利氏家臣玉木吉保の伊勢、熊野、高野山詣も、その出発時の彼の自伝の、

廿四才ハ 世間無事ナレハ 能折節ト存シ、伊勢参宮ニ思立……

との敘述に依れば、亦同様であつたのである。

かくの如く、中世末に於ける熊野参詣者の中には熊野詣でを目標とせず、伊勢参宮等の次いでに行う者が少くなかつた。

しかし熊野は、伊勢参宮街道に当面する訳でなく、相当な迂回と難行とを必要としたから、熊野詣でがたとい副次的行動としても、そこに信仰的熱情の存在は否定されないが、やはりかかる傾向は今後の熊野詣での展開に対し、一つの暗影を投ずるものでなければならぬ。

- | | | | |
|-----|--|------|-------------------------|
| (1) | 拙稿、院の熊野詣(歴史地理八八ノ一)及び「中世に於る熊野信仰の発展(史淵第八五号)」 | (7) | 二階堂文書、応永三十一年三月十日先達慶真願文。 |
| (2) | 国阿上人絵伝。 | (8) | 結城文書二、嘉吉元年七月五日記録。 |
| (3) | 拙稿「中世の伊勢詣」(社会経済史字二二ノ二) | (9) | 八槻文書一、寛正三年九月廿八日過書。 |
| (4) | 室町初期將軍の女房等にかなり盛んな参詣があつた(熊野詣日記) 近く拙著にて発表予定 | (10) | 同 文明十年九月卅日幕府過書。 |
| (5) | 補菴京華外集 | (11) | 同 二、明応四年八月十五日幕府過書。 |
| (6) | 奥家文書、元龜二年三月十二日、龜井重清書状。 | (12) | 同 明応七年壬子十月十日長尾能景過書。 |
| | | (13) | 同 永正六年七月十日結城政盛過書。 |
| | | (14) | 八槻文書 十月十八日神保氏過書。 |
| | | (15) | 同 七月廿六日越前國某過書。 |

(以上の二点は史料編纂所未採訪分筆者昭和三十三年十一月採訪のもの)

(16) 八槻文書二、永正二年七月廿三日秀栄、善順奉書。

(17) 同 三、享祿二年五月廿八日秀栄快延奉書。

(18) 同 四、六月一日前下野守直家書状。

(19) 楓軒文書纂七十二、石川修驗大藏院文書。

(20) 葛西氏のくまの詣では直接実証されないが、中世末幾度か西国巡礼及びその外の物詣でに出掛けている事実がある。則ち天文五年の頃葛西清定が、(増玉県宝雲寺)次で天文十一年頃葛西某が(中尊寺藏)坂東、秩父、西国の百ヶ所巡礼を行つており、更にこの後、永祿十二年頃の葛西晴胤書状には、物詣之望以不図及上洛候……(伊達家文書一、二四八号文書「永祿十二年か」壬五月廿六日葛西晴胤書状)とあるのには、葛西氏と熊野との関係からして熊野詣でも亦含まれているものと思われる。

(21) 潮崎八百主文書乾、応安八年二月十六日辛弁真貞等願文

(22) 六藏寺過去帳。

(23) 内山文書十月二日、実景過書。

(24) 満濟准后日記、永享七年三月十一日、十八日。

(25) 間藤文書所収紀州願成寺勸進帳奥書。

(26) 米良文書四、長祿二年壬正月十七日先達弓藏坊浄春等願文。

(27) 建内記、嘉吉元年四月八日。

熊野詣での衰頹

(28) 二階堂文書、永正八年三月三日先達十河証状。

(29) 小田原古書肆幽学荘舎目録三号に永徳二年三月四日、応永廿二年二月廿三日の外、応永廿四年、廿九年、三十二年、永享八年、文安元年の參詣關係文書あり、外に尚、

豊田武氏紹介(日本歴史一〇〇号)の昭和廿八年熊野展出陳文書にもある。於東横百貨店

(30) 熊野先達(国史学六〇)

(31) 空善記

(32) 身自鏡。

(33) 米良文書四、寛正二年九月十六日善成房売券。

(34) 潮崎穆威主文書二、文明十五年卯月十二日福寿借用状。

(35) 同 三、明応七年九月廿日玉井快助売券

(36) 潮崎万良文書、明応八年六月七日くま又三郎売券。

(37) 潮崎穆威主文書三、明応八年八月廿八日仙良院宥助旦那売券。

(38) 潮崎八百主文書乾 明応九年十二月五日門賀坊大夫売券。

(39) 同 永正五年二月廿日きつこう庵売券。

(40) 潮崎穆威主文書五、天文十八年三月十九日多門坊源亮券外にもあり。

(41) 神宮徴古館農業館文書二、天文九年五月吉日米屋与三郎御師職売券。

(42) 潮崎八百主文書坤、天正十年三月廿二日実報院実勢売券。

熊野詣での衰頹

七〇

(43) 千恒卿記、大永五年八月四日石川文書。永祿十二年八月四日北条氏朱印狀外前出奥家文書。

(44) 伊勢參宮と熊野詣での同時巡拝は、例えば南北朝の頃國阿(國阿上人繪伝)、文明の頃禪僧(庶軒日録文明十八年八月九日)、中山宣親(十輪院内府記長享元年三月十一日)及鳥津氏重臣上井覺兼の計画(上井覺兼日記天正十一年六月十四日)、伊勢、高野、熊野巡拝は、明応の頃

信濃仁科明盛(仁科城主御代々)、天正三年毛利家玉木吉保(身自鏡)。

(45) 拙稿近世初頭の伊勢參宮(日本歴史九七、九八、九九)

(46) 身自鏡、更に彼の伊勢神宮、高野山両者と熊野との関係には、明かに相違があるようである。伊勢參宮は、

七月三日ニハ御伊勢へ著ケリ、高向□大夫所宿坊也、昔ヨリ子細旦那レハ馳走奔走不斜、

とあり、又高野山でも、

宿坊ハ実相院ノ藤ノ坊ニ著、聖ハ昔ヨリ大旦那ナレバ……

と、玉木家は、伊勢御師、高野山宿坊とは昔から現在迄師且關係が存続し、その參詣も現実の生きた信仰に基づいて行われたようである。しかし熊野ではこれとやや異り、

神前ノ祈念ニハ南無三所、権現ハ先祖ノ鎮守ニテ御座有ケレバ

とあり、かつて昔時の關係を説くのみで、既に現在は關係はなかつたようで、參詣も唯彼の信仰に由るよりは、先祖の鎮守という過去の因縁だけによるものようである。熊野信仰、參詣の衰頹しつつある姿を見ることが出来るであろう。

二

我國の神社の中には、八幡社の武神、住吉社の和歌の神、航路の神の如く、特有の靈驗を以て世に著聞された祭神も少くないが、かかる機能神的性格は必ずしも、神社一般の通性とは断じ難い。熊野神等も機能神的性格は比較的稀薄で、むしろ信仰内容が誰にでも向く、極めて多面的であることが、強力な宣伝組織、參詣者の受入体制、即ち先達、御師組織等の發達と相俟つて、熊野信仰の偉大な進出を実現させたのである。従つて熊野信仰に代る新信仰が興隆し、御師、先達組織が崩壊する時、熊野信仰並に熊野詣で衰頹の危険信号が掲げられる可能性が生ずる。

熊野が既に早く古代末に遭遇した経済危機を、大半の社寺は、おかれて鎌倉末以降の荘園制の衰頹、崩壊期に至つて迎えたが、かかる危機の克服手段の一つとして、彼等は先輩熊野同様、信仰の普及と参詣者の誘致とを競うようになった。これら新興社寺の進出による熊野信仰、参詣の低下が予想されるが、特に伊勢信仰発展に依る影響が軽視されぬもののである。かつて詳述した如く、⁽¹⁾伊勢神宮の国主神的性格と御師の活躍とに依り、伊勢信仰は鎌倉末以降、地域、階層、宗派を超えて広汎に普及し、参宮量も亦年々上昇し、特に室町中末期に於て著しかった。しかも、既に、平安末「長寛勅文」に伊勢、熊野同体説が有力であつた如く、両社間には信仰的な近縁関係が見られるのであるから、伊勢信仰の躍進は、既成の熊野信仰の進路に何らかの否定的な影響を与えたものと想像される。かかる伊勢信仰進出に依る、熊野信仰後退の具体例として土佐が挙げられよう。土佐は熊野信仰の有力地盤の一つであるが、例えば、高岡郡では、熊野信仰は津野地方に早くから拡り、領主津野氏は、元弘の頃熊野御師の旦那である外、⁽²⁾当所熊野社には、建武五年同氏奉納の棟札を蔵し、専ら当社の再建に當つている。⁽³⁾更に隣郡幡多郡も亦、古来熊野信仰の進出地であつた。康暦前後以来、幡多郡中村は一熊野御師の繩張に数えられた外、⁽⁴⁾同郡足摺崎金剛福寺は、応永年間幡多荘内諸旦那の熊野参詣先達職を有し、鎮守神として熊野権現を勧請した。⁽⁵⁾かくの如く室町初期迄に、土佐、わけても高岡、幡多両郡の熊野信仰の発展には、相当見るべきものがあつた様であるが、その後の展開は明瞭でない。反つて、これに代るものが、伊勢信仰の顕著な進出である。先の高岡郡津野地方には、伊勢御師北氏の勢力が及び、天文五年頃には、数十ヶ村と数百名の武士層を地盤化する迄に至つており、更に天正前後には、その間から多数の参宮者が見られた。⁽⁶⁾更に幡多郡でも応仁、文明の頃、摂関家一条氏の中村入部等を機縁として、伊勢信仰が拡まり、農民の相次ぐ参宮があつた。⁽⁷⁾足摺崎金剛福寺附近でも、享祿前後、鯨波を冒し遙々参宮して生命を失う者あり、為に今迄の熊野神社に代り伊勢両宮を勧請するに至つたのである。⁽⁸⁾

以上は既成の熊野信仰地盤に対する、伊勢信仰の新たな進出を物語るもの様に思われるが、これは奥州等を除き、少く

なかつたものと考えられる。更にこの外、各地に見られる熊野道者、熊野先達の伊勢御師の旦那化等も亦、熊野信仰の地盤に滲透しつつある伊勢信仰発展の一樣相ではあるまいか。このように伊勢信仰又はその他の信仰の進出に依り、熊野信仰の既成の地盤がつき崩されるという事はすくなくなつたであろう。しかしこれが過大評価は慎しまねばならず、一方に於て、中世末から近世にかけて、熊野の地方勸請も亦多いのである。従つて中世末以降の熊野詣での衰頹は信仰自体よりもむしろその他に原因が求められねばならないであらう。その一つに永年熊野詣での発展に主導的役割を演じてきた山伏先達の變質が、挙げられるであらう。

中世末期に於る山伏、先達の定住化⁽¹⁾と山伏の斗敷回避、修験道一般の衰頹が相当顕著なことである。これは、山伏⁽²⁾先達に參詣者の把握と誘致とを依存していた熊野山にとり、少からぬ打撃でなければならぬ。天文前後と推測される「住心院文書」三月廿一日源春並に杉本坊の連署書状に、

相模国大山修験道 近年乱候故 大峯修行之者 然々無之

とあり、かかる大峯修行減退の結果か、大峯では、

宿々或退転或及大破…

の状態に陥つた。⁽³⁾熊野でも、天正六年陸奥大祥院及び出羽陸奥の熊野年行事に、修行道の退転を説き、国中を催して年々この道に専心すべしと懇えている。⁽⁴⁾

かくの如く、斗敷の減退、修験道の衰微、山伏⁽⁵⁾先達の定住化は、自然彼等をして熊野本山より遠ざからしむるが、更に熊野先達が、伊勢御師の旦那となり、又は、伊勢その他諸社寺の先達等を兼務したのは、この傾向を促進する一因でなければならなかつた。更に、熊野山伏、先達は従来熊野山、聖護院等の統制下にあつて、現地封建領主の支配から独立していたのであつたが、戦国大名による分権的封建制の進捗に伴い、自然大名は彼等先達、山伏に強力な統制の手を及ぼす

に至つた。この事は熊野山聖護院と山伏¹⁴先達間の階級關係に、くさびを打込む結果を來したであらう。かつて全国的に分布して民衆と熊野との仲介的役割を果し、参詣者の誘致を担当した先達が、かくして熊野山の支配から脱落しつつある事實は、熊野信仰、参詣發展の爲の、有力な末端機構の衰微を意味するに外ならない。かかる危機に際して、熊野側でも種々対策を講じたのは当然であらう。これより先、文明十八年、熊野三山檢校、聖護院准后道興が、広く東国を巡歴し、山伏、先達と会同し、その家に泊りを重ねたのは、その意図は兎も角として、結果的に熊野信仰の有力拠点東国の山伏、先達と熊野とのきづなを強化し、地盤固めに相当寄与したものと考へねばならぬ。しかし乍、その後の先達の離反、脱落等は、当時の熊野参詣の低調化を一つの機縁とすると共に、熊野参詣の今後の展開に暗影を投ずるに至つたであらう。當時、伊勢神宮では多数の御師が活躍し、連年繩張を巡歴して且那との緊密な關係を不断に保つと共に、熊野先達及び地方寺院を抱き込んで、己が先達化しつつ、その勢力の拡大を着々実現しつつあつたのである。かかる御師自身の巡歴こそは、戦国時代戦乱の全国化により、中央地方間乃至地方相互間の聯絡、交渉の杜絶し勝ちな社会状勢下に於て、地盤の維持、拡張の爲には不可欠な手段であつた。従つてかかる巡歴はひとり伊勢神宮のみならず、当時富士山、白山、彦山その他の神社でも行われたのである。¹⁶しかし乍、熊野では御師の廻国の体制が生れず、御師は遂に山を出る事なく、しかも地方機関先達が離脱しつつあり、従つて御師の自由な活動は妨げられ、半身不随化しつつあつたのである。ここに地方信者と熊野山との連絡は絶たれ勝ちとなつた。ここに熊野山が伊勢神宮その外、一般諸社寺の布教の熱意と努力の前に圧倒され、次第に時流から取残されて行くのは一つの必然的な運命であらう。

更に室町時代に於ける熊野詣での低調、不振、更には衰頹の一因は、しかも重大な一因は、その地盤の地域性にある。則ち平安末から中世初頭貴族の信仰参詣以後、その主要地盤は、東国武士層を中心とする遠隔後進地区であつた。かかる地域は熊野より遠いだけでなく、一般に生産力が低く、農民の隸屬性が強く且つ貧しい。従つて彼等は、御師、先達との師

且關係に依つて熊野山との信仰的聯りを持ち得たとしても、その信仰を参詣として実践化する事は容易でない。伊勢参宮の場合に於て明かな如く、生産力の高い、農民解放の早い先進地区畿内地域に於ては、多数の農民、商人が参宮に参加し、伊勢参宮発展の有力な支柱となつたのであるが、しかし乍伊勢参宮でも畿内以外からは、一般農民の参加は極めて低調である。この事から推しても、東国の農民が容易に熊野詣でが出来ない事は明かで、前掲室町期に於る東国参詣の例も全て武士に限られているのである。従つてかかる東国地方を主要な地盤とする限り、参詣者は武士、地侍層等に限られ、農民は容易に参加し得ない。しかも、先掲御師、先達の師且關係文書よりすれば、武士の参詣すら停滞、低調化しつつある模様である。ここに一般参詣界の趨勢に逆行して、熊野詣での不振、衰頹の危険性がある。熊野詣での衰頹は、次代の江戸時代に入れば極めて明確の現象となるが、それは必ずしも江戸時代に始まるのではなく、既に中世末期に顕在化しつつあるものである。しかしその外にも考慮されねばならぬものがある。それは、戦国時代に於る大名との接触、結合の一般的不成功并に、熊野信仰の有力な支持者東国武士の相次ぐ没落であろう。

別に論じた如く、戦国期以降、江戸時代の伊勢参宮、高野詣での発展には、刮目すべきものがあるが、その有力な一因は、戦国大名との密接な結合の成功にある。伊勢御師、高野宿坊は、実に多数の大名への布教に成功し、彼等の旦那化に依り、大名個人の莫大な財政的援助を得ると共に、大名支配下の多数の家臣、領民を同時に地盤化し、彼等を参詣に誘致するに成功したのである。熊野御師、先達が、伊勢御師、高野宿坊の如く、戦国大名とよく提携し得たならば、大名個人の参詣の外、家臣、領民の参詣を実現し得たであろうが、先述の如く御師、先達等の無力化に依り、彼等はよく大名を把握し得ず、為に熊野と大名との提携は極めて低調であつた。かくの如き、大名との結合の不振は、熊野信仰、参詣の今後の進路を決定すべき重要な目安とならう。

更にこの意味に於て、これと劣らぬものに、熊野御師の最有力地盤、東国の国人層II中小豪族の相次ぐ没落があつた。

室町中期迄熊野御師最大のパトロンに結城、田村、葛西、大崎、石川氏等奥羽の国人層があるが、彼等の今後の運命の展開如何に、熊野信仰の盛衰の一端が懸けられていたと言つても過言でない。則ち彼等が若しも、その後戦国大名へと成長し得たならば、熊野信仰並に熊野詣での発展にとり好ましい結果が見られたであろう。しかるに重代に亘り熊野信仰を伝持した彼等東国国人層の過半が、戦国大名に発展することなく、反つて戦国大名に併呑され、没落し去つたのは、熊野にとり重なる不幸な事件であつた。かつて売買価格百貫文という熊野旦那に稀な経済価値の高い奥州葛西氏は、同じく熊野の旦那大崎氏と共に、北条氏征伐の不参加を理由に、秀吉により領地を没収された。八槻氏の旦那白河の結城義親と同じ運命に際会して後、伊達氏に服属し、又同じく結城氏と相並ぶ南奥の有力旦那石川氏亦この前後に没落し去つた。更に田村氏も亦その頃伊達政宗に屈服し、ほぼ同じ運命を辿るに至つた。かくの如く、熊野信仰並に御師の最有力基盤、東国国人層の相次ぐ没落、滅亡は亦、今後の熊野信仰、参詣の針路の前に立塞る赤信号でなければならなかつたのである。

進出の形跡のない僅かな国の一つである。伊勢信仰の熊

- (1) 『中世の伊勢参宮』(国民生活史研究一所収)
 - (2) 潮崎稜威主文書一、元弘三年三月十三日高吉目安。
 - (3) 津野氏家系考証。
 - (4) 潮崎稜威主文書一、康暦元年十二月廿日清水清氏旦那渡状、応永廿二年十一月十日幸範売券。
 - (5) 金剛福寺文書、応永廿五年三月廿七日権律師慶法奉書。
 - (6) 神宮文庫蔵来田文書及び同文書所収天正十四年旦那帳。
 - (7) 拙稿『近世初頭の伊勢参宮』(日本歴史九七、九八、九九号)
 - (8) 金剛福寺縁起。
 - (9) 奥羽地方は、加賀と共に、室町時代に於て、伊勢御師の
- (10) 拙稿『熊野先達』(国史学六〇号)
 - (11) 和歌森太郎氏、修験道史研究第四章第一節。
 - (12) 若王子神社文書二、七月廿四日某条書。
 - (13) 石川文書、三月五日鎮乗、快弘連署状。
 - (14) 例えば、信玄家法の左の条文は、分国内の称宣、山伏に對する、所縁本山の支配を断ち切り、武田氏が直接統制

の手を及ぼそうとしたものであろう。

一 称宜竝山伏等之事者不可頼主人、若背此旨者、分国徘徊可為停止事、
廻国雜記。

(15)

中世の御師（北大史学創刊号）

(20)

那智実報院と今川、龍造寺、島津、毛利、徳川氏等との間に、牛王等の贈答がある。しかし更に伊勢御師、高山宿坊の如く、彼等大名を介して、その領国領民にその地盤を拡張しようとする熱意は、全然認められない。

(16)

前掲拙稿「中世の伊勢参宮」及び「中世の伊勢講」参照

米良文書四、延徳四年卯月十八日良有等巨那壳券。

(17)

拙稿「近世の伊勢参宮」（日本歴史一四六、一四八）及び高野山詣で（九州大学九州文化史研究所紀要創立廿五年紀念号）

(21)

花見朔巳氏、安土桃山時代（綜合日本史大系）五一二頁、五三—五二五頁参照。

(19)

この点十分な史料の準備を欠くが、米良文書一及二には、

三

江戸時代に於る農民の解放及びその成長、都市の発展商人層の上昇等は、一般社寺参詣の発展を促す重大な内因的要素であつたが、更に諸々の外因的要素の累積により、社寺参詣は、未曾有の記録を示すに至つた。則ち、例えば街道旅宿又は慰楽設備の充実、乗物の普及、道中不安の解消等いわば交通環境の著しい改善、好転が人々を一層容易に旅に駆り立てるに至つたのである。しかし乍ら、通常少からぬ出費を伴い、農業経営に支障を来たす怖れある農民の旅に対し、封建領主はこれを黙過する筈なく、むしろ抑制乃至禁止する方針を採つていた。ただその旅が宗教的なもの、則ち社寺参詣である場合に限り、その出国は比較的寛大に取り扱われたのであつて、とくに伊勢参宮に於てその傾向は最も著しかった。従つて人々は挙つて社寺参詣とくに伊勢参宮に藉口して旅に出るようになり、参詣量は、顯著に上昇を見るに至つた、江戸中期、伊勢参宮の年間、四、五十万を最高とし高野山、本願寺、善光寺、成田山、金毘羅宮、四国遍路その外、全国無数の有

名社寺は何れも参詣者を以て賑わつたが、その詳細の全貌に就ては、近く発表の予定であるから省略に止めたい。

以上の如く、近世に於て、参詣は、一般に飛躍的發展を遂げたが、その反面当代に入り、参詣の凋落し、昔日の面影を止め得ない斜陽社寺も若干あつたのである。その最も典型的なものが熊野詣である。

中世中期以降、種々な角度から、熊野詣での下降は推測されながら、参詣自体の現象面では未だ、それは十分明瞭に表現されなかつた。しかし乍ら、近世に入つては、その衰頹振りはまごうかたなき明白な事実となつたのである。

先づ参詣に深い関連を有する御師の活動を見るに、その地盤の縮少が窺われる。⁽²⁾更に御師の数も、那智では万治三年三十四家、寛延元年四十余家であるが、その後減少し、寛政十年廿四・五家、明治三年三十一家を数えた。恐らく中世より減少したであろう。⁽⁴⁾更に、かつて熊野参詣の誘導者として、その發展に絶大な功績を打ちたてた山伏、先達は、中世以降次第に斗敷から遠ざかり、定着化し、熊野山の支配、統制から離脱し、熊野山と信者との仲介者的、先導的役割を自ら放棄しつゝあつたが、この傾向は近世に於て更に高まつた。これに伴い熊野山の配札活動等も自然低調化しつゝあつたのである。

寛永の頃、島津藩領に入り込む出家、山伏には、伊勢、愛宕、多賀、鞍馬、高野山等の外、熊野あり、更に降つて文政年間、因幡邑美郡及び石見美濃郡に神札を配る熊野関係者があつた。⁽³⁾しかし、かつて熊野信仰の金城湯池たる、東国地方に於る彼等の活動は低調の様である。文化の頃、井伊家領武蔵世田谷の代官大場氏を、年々配札に訪れる者に、榛名山、江ノ島、大山、御嶽山、鹿島、愛宕山、多賀社、津島社、富士山、高野山、伊勢等があるが、熊野は見られず、又出羽、村山郡地方でも、幕末配札する者に、地元の鳥海山、湯殿山等を始めとして、遠くは鹿島、香取、津島、伊勢等があつた⁽¹⁾が、ここでも亦、熊野の姿は見当らない。これは配札に携わる熊野山伏、比丘尼等の活動の低調化を意味するものと思つた⁽¹⁾が、事実彼等の存在は、次第に世人の視界から遠のき、やがて忘却し去られるのであつた。熊野信仰の有力な伝播者、熊

野比丘尼も、既に江戸初期遊女化し去つて¹¹、本来の使命を喪失しつつあつたが、それすら年と共に漸減し、遂に姿を消すに至つた。天保頃の本居内藤の「賤者考」は熊野比丘尼に就て、¹²

おのがわかき比、聞しるのみにて、ふつに見たる事なし……と述べており、当時殆どその跡を絶ちつつあつた模様である。

以上の諸事象は、熊野信仰衰頹の原因であると共に、その結果でもあるが、これは亦近世熊野詣での大勢が、凡そ如何なるものであるかを予想さす有力な手懸りとならう、それならば、近世熊野詣での実相はどうであらうか。元禄の頃、一案内記に、

西は鬼界か島、北は佐渡の果の人までも、破れ笠に、雲を凌ぎ、複子に糧を包みて、歩を運び、身のやつれを忘れ、
現当二世の為に、歳々月々に参詣せずといふことなし、是、権現の善巧方便、他に勝れさせ給ふ故也、

¹³と、遠隔参詣者の存在を伝えているが、既にこれより以前、参詣はかなり減退していた様である。元禄を遡る約三十年前の寛文四年頃、那智最大の御師、実相院の衰微甚しく、既に二百両の巨額の借銀を背負つていたが、これは、

……近年諸国の参詣少く、檀方のたすけうすい……
為であつたのである。¹⁴「倭訓栞」には、

蟻の熊野詣といふは、中古貴賤参詣一道を往来し、絡繹たえずして、今の伊勢参りの如きよりの諺なるべし……

¹⁵と、「蟻の熊野詣」なる比喩が、既に死語化し去つた、当時の熊野詣での衰頹振りを伝えている。更に明和の頃本居太平が、伊勢参宮の盛況を、かつての熊野詣でと比較して、

……むかし熊野にこそは、かくまうでけらし、今もことわざに、蟻のくまのまゐりといふことのあめるは……
と述べたのも、¹⁶ほぼ同様の趣意と解されねばならない。更に、その後の「とばかり」にも、

かく繁榮なりし熊野なるに、いつの比よりか、おとろへたりけん、今は徒人さへ參詣する事は、まれまれの事也、物の盛衰はかるべからず……

と、當時參詣者の稀なことを伝えている。かくの如く、熊野詣では近世を通じ、年を追うて漸次衰微の一路を辿つたのである。

ひるがへつて、近世の地方史料に就て見ても、熊野詣での史料は、他の社寺參詣史料に比して格段に少いのであつて、ここにも熊野詣での衰頽が、大体裏付けられよう。管見による限り西国は北陸地方等からは、未だ熊野史料は検出されず、わづかに畿内、東国地方に見られるにすぎないのである。かかる近世熊野詣での衰頽の一つには參詣界に於ける武士の地位の凋落があろう。中世熊野詣での主役は武士であつた。しかるに中世末、熊野の有力なパトロンである東国武士は相次いで没落した。加うるに、近世封建制度の完成により、封建的勤務からの一時的離脱を意味する武士の旅₁₁參詣は一般に著しく困難となつたが、とくに迂回を必要とする野熊詣では、殆ど不可能となつた。こうしてかつて熊野詣での大半を占めた武士の姿は熊野路から消え失せたのである。一般の社寺では、武士に代り參詣界の王座にのし上つた農民商人等大量の民衆をよく誘致して、繁榮を続けたのであるが、これに反して熊野では、後述の如き立地上の悪条件等が禍して、民衆の把握に成功しなかつたのである。わづかに、伝統的な熊野信仰の淵叢東国の民衆の訪れに依つて、余喘を保つたすぎなかつたのである。

近世を通じ東国地方に根強く熊野信仰の残存することは、他地方に殆ど見られない熊野講の存在する事実からも窺われる。¹⁸⁾かかる信仰を母胎として少からぬ東国農民が熊野に旅立つたのである。

『西国三十三所名所図繪』『田辺』の項では、

別て東国の旅人は、熊野三山の靈場を拝し、恙なく此地に出るを歎び、山祝ひとて、はたごやに於て餅をつき……と

あるのは、「田辺大帳」にも誌されていることであるが、東国人の少なくなかぬことを匂わせている。具体例では、仙台藩の延宝三年二月御定ヶ条に

一、在々百姓伊勢、熊野、高野、湯殿参詣云々

とあり、又会津藩でも、元文二年の規定に

伊勢、熊野参詣云々

とあり、⁽²⁴⁾仙台、会津両藩に於る熊野詣では、伊勢参宮などに次いでかなり行われていたようである。その外、東国参詣の実例は、注記に譲るが、⁽²⁵⁾熊野詣ので伝統の火は、東国農民の手に確実を受け継がれたのである。

中世に於ては、極めて困難であつた東国農民の熊野詣でが、近世農民の上昇成長により、広汎に実現されるに至つたのである。

しかし乍全般的には前述の如く当時熊野詣でが次第に衰微しつつあつたことは疑ない。

かかる参詣の減少により、従来、経営、修造費の過半を信者や参詣者に依存していた熊野山に、財政の危機と院宇の荒廢とが訪れるのも亦自然であつた。既に寛文の頃、那智御師が巨額の負債を負い、又本官が、焼失廿九年後の寛政十年頃、まださやかな飯宮のまま、再建の見込立たなかつたこと等は、その例である。⁽²⁷⁾かかる財政切抜け策として、熊野では種々な手段を講じたが、紀伊藩等の後援による金融業や、⁽²⁸⁾出開帳等もその一つである。出開帳は、当時社寺の資金獲得の有力な普遍的手段であつたが、参詣者の多数を失つた熊野では、特に頻繁な開帳を余儀なくされたりしく、「熊野年代記」だけでも、和歌山、松坂、大坂等中心に十数回見られる。

以上、江戸時代に於る熊野詣での衰頹は明白であるが、その原因は何であらうか。上述に掲げた諸因の外に更に熊野の立地条件を加えねばならない。「嬉遊笑覽」は、

今人多く鹿嶋詣はせで、まづ京、大坂、大和めぐりをすめり、神仏に参るは、傍らにて、遊樂をむねとす、伊勢は順路なれば、かならず参宮す、

と述べている²⁴。これは遊樂に対する社寺の立地条件の適合性如何が、参詣発達の左右を規定することを指摘したもので、従つて関東の辺鄙に位して、遊樂に無縁な鹿島社は人々に顧みられなかつたのである。熊野も亦、立地上、畿内文化地帯から遠く隔たり、路次の慰樂施設は依然乏しく、嶮路の難行を続けねばならず、中世以来の不便の多くは解除されない。熊野並に熊野路に於る人家の寡少、生産の貧困から、古代はもとより、中世の参詣者も亦食糧の現地調達が困難な為、これを携えねばならなかつた。しかるに近世に入つても尚、熊野詣者がかかる不自由から解放されなかつた模様である。ここで、西鶴の「世間胸算用」四に：：熊野参りの小米苞：：とあるのが注意される。則ち熊野詣には、路用の食糧を入れたわら苞を持参するというのである。既にこれは過去の事情か、現実の事柄か明瞭ではないが、熊野に限り、かかる合言葉が通用したのも、当時に於る熊野詣でが、尚多分に不便であり、苦行的なものであることを物語るものであろう。

現在尚、伊勢、及び紀州田辺よりの寂しい両熊野路、又は熊野本山一帯の貧しい環境に身を置くならば、この事はうなずけるし、又熊野詣でが到底遊樂旅行となり得ない事も直ちに了解されるであらう。

近世の参詣が、極めて遊樂的であつたことは否めない。民衆とくに農民は、その貧しい日常生活と、それに加えられる不断の厳しい封建的・共同体的規制との一時的解放と悦樂とを求めて続々と旅へ参詣に出掛けたのであり、その結果近世参詣は、中世的な信仰的意義を多分に失いつつ、レクリエーション化したのである。しかし乍ら、かかる不純分子の大量参加によつて、始めて中世と比較を絶した尨大な参詣量を算し得たのであり、近世参詣はまさに質的退化の代償の上に、量的な飛躍的發展を実現したのである。

しかるに熊野は立地上「嬉遊笑覧」に掲げられた鹿島社同様、遊樂、觀光には縁遠い存在であり、到底、遊び半分で訪

れられるような処ではない。わづかに、中世乍らの比較的敬虔な信仰の持主の登山が期待されるにすぎないのである。伊勢信仰等も、他地方より極めて篤いとされる先の東国農民は、たしかにその類に属するであろう。熊野詣でが、近世に入り、減少したのは事実であるが、しかしその反面不純分子の参加少く、敬虔な東国農民により一般社寺が大方失いつつあった純粋な信仰の内実を尚濃厚に保持されたことはやはり注意に値しよう、この点からして近世の熊野詣を衰頹と規定することは、或は一考を要することかも知れない。

(1) 近く『我が国社寺参詣の社会経済史的研究』として発表

の予定

(2)

熊野御師の旦那名簿からは、必ずしも直ちに御師勢力の後退を裏付け得ない。例えば、慶長四年廊の坊旦那目安にも、三十三ヶ国の外、日本国中名写一円として数十名の苗字が挙げられ、又同じく慶長六年六月の『那智山仙滝院持分旦那指出』にも一七八ヶ所あり、寛永九年那智実報院旦那名簿でも四十六ヶ国が掲げられてある。以上に依れば、近世初頭に於て、彼等御師は一見中世乍らの地盤を維持し続けたようであるが、その実状はどうであろうか。寛永九年那智最大の御師実報院の場合示された四十六國中、国名の下に郡乃至村郷等、具体的地名を明記したものは僅かに半数近い廿四ヶ国に過ぎない。残余二十二国は、単に国名のみが記され、しかも、国名の下に一円乃至半分三ヶ一、三ヶ二等とあるが、かかるあいまいな表現をとる地方が、当時果して、実際の地盤と看做される

であろうか。恐らく答は否定的であろう。那等具体的に地名を明記したもので、摂津多田荘、越後かじの庄、若狭なたの庄等中世的な荘名を以て記載しているのも一般に当時の実状と合致しないであろう。全体として実報院旦那帳が、中世以来の地盤の丸写しで、必しも現実地盤の忠実な表現でないとの強い印象を拭い得ない。又、潮崎八百主文書坤所収寛永十一年六月八日某熊野旦那売券に依れば、その近江しまの郷、同国長命寺、かな松尾一円及び下野一音坊名字の分、大田一族、さい田、御戸、米山等の先達引きの旦那及び金子与一一門、遠江の国、うり山なし、ミヤこた、かなや一円、駿河、嶋田一円、府中半分、興津一円、市川名字一円及び伊勢、関寺等が、僅かに銀三十五匁に過ぎない。孝亮宿禰日次記・同年四月廿日条に依れば当時、京都では、米一石の値段銀三十三匁であるから、これだけの旦那が僅かに一石を少々上廻る程度に過ぎない。かかる近世初期の熊野旦那の経済価格の低きは、旦那が御師にとり有名無実にも近い存在

である事を裏書きするものであろう。かかる傾向が年を追うて顕著となる事は疑ない。

(3) 那智神社編、熊野三山とその信仰

(4) 拙稿「中世の御師」

(5)

中世熊野先達として先に度々引用した八槻文書の製藏者、福島県東白河郡八槻淳良氏(旧大善院家)は、片面十三行両面廿六行野残紙百八十枚の目録にも及ぶ、数千点の史料を所蔵しているが、その大半は江戸時代のものである。大善院が山伏として、大峯に關係し又は登山した事は、御入峯諸上納取調帳嘉永二年四月(目録七五枚目)大峯釈迦御堂御修覆出銭取立帳文化七年十月(同)

大峯講道中休泊附(目録一二八枚目)天保十三年二月上京三峯修行諸扣帳(一二七枚目)等により明らかであるが、しかし彼が旦那を引卒して熊野詣をした形跡は殆どない。それらしきものとして僅かに享保十一年十一月の熊野人数覚、同棚倉領同行人別帳(一三八枚以降)があるに過ぎない。しかし、明和三年の熊野講出入濟国引替証文写等があり、熊野詣があつたようであるが、しかし、熊野信仰は殆ど認められない。

(6) 高野山文書旧学侶方一派文書一一九号
(7) 穂積重遠氏五人組法規集続下附録十五
(8) 前田正治氏日本近世村法の研究一五二号文書
(9) 家例年中行事(世田ヶ谷区史料一)二五四頁
(10) 嘉永六年十月取締議定書(山形県史四)

熊野詣での衰頹

(11) 「我衣」(温知叢書九十)に寛文以降売女のキサシヨアラハセリとある。及び人倫訓蒙図彙卷七、元禄三年

(12) 本居内藤全集所収

(13) くまの歩行記(和歌山県御坊町芝口常楠氏藏、同氏の好意に依り拝借し得た事を感謝する)

(14)

(15) 実方院旧記

(16) 同書上ありのとわたり

(17) おかげまうでの日記(神宮参拜記大成所収)

(18) 神宮隨筆大成前所収

(19) 最近迄東国地方にまま熊野詣が見られる。群馬県利根郡赤城村利根にある外、山梨県北巨摩郡増富、小泉大泉等

(20) がその例である。しかし山梨県の数多い講の中、熊野詣はこっけで、分布度は他の講に比較して著しく低い、

(21) (桜井徳太郎氏)「日本民間信仰論」の中には現に参詣の行われているものもある。その外福島県石城郡大越村でも男子のみの熊野講あり(綜合日本民俗

(22) 語彙一御釜講)又前掲福島県東白河郡の八槻家に、明和三年の熊野講出入濟国引替証文がある。

(23) 仙台藩農政の研究所収

(24) 会津家世実紀一三七元文二年十一月廿一条

(25) その外塩尻三七にも出羽中島村の村民熊野詣七ヶ度の例あり又出典を明かにしてないが、兄玉洋一氏も、奥州糠部郡等から江戸時代熊野詣でが盛んで、この傾向は明治廿五六年迄続いたと述べている。(熊野三山経済史一七六頁)又昭和卅三年現在七十五才で、伊勢神宮史に詳し

熊野詣での衰頹

い、伊勢市大西源一氏に依れば、同氏の幼少の頃、東國より、伊勢参宮して更にそれより先を延して熊野詣でするものが多かつたという。

勿論東國以外の熊野詣での存在を否定するものではない。例えば、畿内では岸和田藩(貝塚市史三ノ一六一頁)その他あり、又「かぶきさうし」『浮世道中膝栗毛』後篇等江戸後期の作品にまま見られる『伊勢へ七度、熊野へ三度愛宕さまへは月参』の俚謡がある。この発生地は明かでないが、『愛宕さまへは月参』等愛宕との距離の近さより推測して恐らく京都附近であろう。その正確な解釈は困難であるが少くともこの地方からの熊野詣での存在を物語るものであろう。尚、それは現在山口県袖野地方の手毬唄にも残っており、かなり広汎に語られたものらしい。(松岡利吉氏袖野民俗誌二一六頁)

(22)

林信章『熊野詣紀行』寛政十年(上掲芝口常楠氏藏)

(23)

児玉洋一氏『熊野三山經濟史』第二章

(24)

同書十一乞士

(25)

東國人が特に信仰に篤いことは伊勢等でも屢々聞く処である。橋村正環の手記故実郷談(宇治山田市史所収)に依れば、大々神樂をあげる者は関東奥羽の参宮者が多いとあるが、大西源一氏も東國人の信仰は一般に強く、為に東國を繩張とする御師は、西國のそれに比較して、一般に富裕だつたと述べている。

The Decrease of Kumano (熊野) -visitors

Tsunezō SHNIJO

The pilgrimage to the Kumano Shrine, which had been in the height from the ancient times to the middle of medieval age. became gradually at low pitch. There were many reasons, and the decay of missionary, and inducing organizations such as O-si (御師), Sen-dati (先達), the rise of Ise-Belief were some of them.

Later, in the period of Edo (江戸), with the recreationalizing of general pilgrims to temples or shrines, the number of Kumano-visitors, where was nothing to do with sight-seeing from locational point of view, was further decreasing, only comparatively small numbers of the devotee with peasants of East-country as the nucleus.